

日産アートアワード 2017
ニューヨーク滞在レポート
International Studio & Curatorial Program(ISCP)

藤井光

近年の私の作品の傾向として、一つの作品を完成させるまでに、一年から三年を費やすようになってきました。制作が長期化する傾向にあって、短期のレジデンスの滞在が、私に何をもちたらずのか確信が持てないままに日本を離れました。しかし、ISCP の滞在は、結果として有意義な時間となりました。各国からアーティストやキュレーターが30名ほど滞在する ISCP には、著名なアーティストから若手まで様々ですが、国内外の美術館・ギャラリーで発表の経験がある中堅アーティストが中心でした。そのため、レジデンスでの制作活動は、新たなプロジェクトを立ち上げるというよりも、「次の展覧会の準備を粛々と進める」という雰囲気が支配的であったと思います。私も同様に、次の展覧会やレクチャーのリサーチや準備に集中しました。また、幼い子供を育てている同世代のアーティストも多く、子供たちをニューヨークに迎え保育園に通わせている者たちが何人もいたことは今後の参考になりました。

制作に集中できる環境は、一方で引きこもりがちになるため、ISCP では外部とのコミュニケーションを促すプログラムがいくつも用意されています。定期的に行われるレクチャーやディスカッションに加え、キュレーターや批評家の訪問も多く、それぞれの出会いは忘れられません。特にダイバーシティやフェミニズムに関する展覧会を手がけるキュレーターとの意見交換はその後の自分の活動に影響を与えていくと思いますが、その領域の展覧会や著作のある ISCP のプログラムディレクターのカーリー・コントの役割は大きかったと思います。また、ニューヨークの美術館・ギャラリーの見学だけでなく、遠方のマサチューセッツ現代美術館やクラーク美術館まで行くこともありました。このように ISCP の滞在は充実していましたが、施設内のギャラリースペースで展覧会を開催するというパブリックプログラムがあり、審査の結果、私が選出されたのは幸運でした。これがアメリカでの初めての個展となったのです。



レジデンス参加者によるトーク



見学「Radical Women: Latin American Art, 1960-1985」展(ブルックリン美術館)



見学 コロンビア大学内で試みられる現代美術展



見学「Taryn Simon」展(マサチューセッツ現代美術館)



見学「Women Artists in Paris, 1850-1900」展(クラーク美術館)



ISCP ギャラリーでの個展